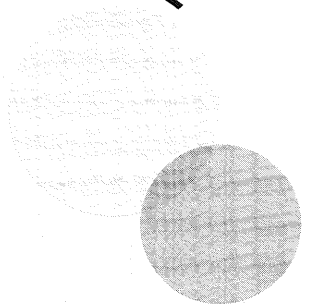


内側から開く



杉本裕子

学生たちの戸惑い

保育者を養成する教育の現場では、学生たちに保育の実践力を育てようと、カリキュラムの編成、講義や演習の授業方法、教育実習の指導、個別の指導の充実などに、さまざまな努力と工夫を凝らしています。教室で学ぶ多くの事柄やそうして学ぶことのできる力自体も、保育実践力の基本として欠かせないのは確かです。けれども、それだけではどうして

も届かない―学生たちがたとえ自分の奥にもっていても発揮し始めることのできない力のようなものがあると、養成者はみな感じています。外側からは開けることのできない扉のようで、「ああ、ここさえ開けば……」と、もどかしい思いを抱える養成者は多いでしょう。

実際、保育者を目指す学生たちが授業場面で途方に暮れることは少ないと思います。もう長いこと学校が主要部分を占める生活を送ってきているわけ

で、教室でどう振舞えばよいかもよくわかっています。しかし、保育者になるために求められていることが自身の切実な課題として現実的に迫ってくるようになる、授業を受けているだけではすまないという状況に気づいていきます。発言したり、問いに答えたりと積極的に授業に参加するだけではなく、自ら動き、かかわり、判断し、保育の時空間を「創り出す」ことが求められていることに気づき、その高度な要求に愕然とするのではないのでしょうか。

もともと、教育実習の事前指導などで学生たちと話していると、こちらが思うよりもずっと素朴な不安に戸惑っているように見えます。「私、人前で話すのは苦手なんです」「誰かに見られていると思うとあがってしまって何も考えられなくなる」「人見知りするので、よく無愛想だと思われてしまします」……手足がすくんでいる状態です。

教育実習から帰ってきた学生たちに、何に一番苦労したかを聞くと、「大勢の子どもたちを一人でまとめられなかった」「目の前の子どものことしか見

られず、それ以外の子どもことは全然わからなかった」「けんかをどう仲裁したらいいのかわからず側にいたのに何もできなかった」「ままごと遊びが苦手で、いつも同じ遊び方や相手の仕方になってしまった」「教員の目が気になって、緊張してしまった」「向こうからかかわってきてくれる子しか遊べなかった」……子どもや保育者たちとの出会いはどうだったのでしょうか？

原体験

筆者自身が優れた保育者であるとはとても言い難いのですが、少なくとも、優れた準備を学生の時期にさせてもらったとは思っています（ここにある矛盾には目をつぶっていたいただきたい）。それは演習の授業として組まれていたもので、学内に親子で参加する遊びのグループを設け、学生と養成者である教員が共に保育スタッフとしてそのグループを運営するといふものでした。通年の定期的な開催で、グループのメンバーも固定していました。親子とは午

前中の二時間ほどを一緒に過ごすのですが、親子が帰った午後からは、半日をかけてその日の保育と親子の様子を振り返り、考察し、学び、その先で次の活動を検討し、準備をしました。学生も教員も、一人ひとりの発言量や活動量は均等か、むしろ学生が主でしたし、互いの発言や活動に払われる敬意も同等でした。知識も経験もほとんどない学部生に対しても、教員や院生がそのような態度を維持することは、どれほどの配慮と自制に基づくことかと、大学の一年から参加した私にとって、そのこと自体が非常に印象的で心に深く刻まれました。

さらに幸いしたのは、外部のボランティア実習先でも同様の経験をしたことです。ユニークな保育実践現場に、保育者としての技量や経験を厳しく問われる代わりに、「あなた自身の存在として」場を共にすることを求められました。とはいえ、経験のない実習生に何ができるでもなく途方にくれて一日を終わるのですが、その後に教員（保育者）たちともゆっくりと、じっくりと「話す」時間が設けら

れていました。実習生に対してなんて丁寧なことかと思っただけでしたが、それどころか、それは欠かせない場・時間として教員たち自身が大事にしている時間だったのです。実習生である私にとって興味深いひと時であったのはいうまでもありませんが、教員にとってどのような意味があるのか、その頃の私には不思議でした。

内側から開く

自分の学生時代のことを原体験として、私自身が保育者養成に関してはつきりとした方法論を抱くに至った——というわけではないのですが、「あのような場」を学生たちに経験させてあげたいと、ずっと思っていました。その後、多くの人の理解と協力のもと、学内に親子で参加する遊びのクラスを設けることとなり、私もその一端に参加する機会を得ました。ここでは、学生たちが晴れやかな表情で保育者を目指し始めるのを、繰り返し確認してきました。以下は、そのような学生の一人に聞いてみたもので

す。この学生は学部の三年次から二年間、週に二回ボランティア実習生として親子クラスに参加していて、卒業後幼稚園教諭として働いています。このインタビューは卒業前に行ったものです。

Q このクラスで他の保育者と子どもとのかわり方を見て、印象に残ったことは何ですか？

A 同じ時間で同じ遊びをしても、その人その人によって展開の仕方、言葉かけ、雰囲気などがみんな違うので、そのことを一緒にいる中で見たというところがとても印象に残りました。穏やかな人、優しい人、元気な人……その人によっていろいろな保育があるのだということを肌で実感できたと思います。それに、みんな子どもが大好きで、彼らの一つひとつの様子に一喜一憂して、楽しそうにかかわっている姿が何よりも印象的でした。

Q 保護者の方とのかわりについてはどのようなことを考えましたか？

A お互い遠慮してしまうことがあったように思っ
たし、あまり大変なことだと思いつき過ぎず、どんなことでもいいから話しかければよかつたな、と思いつ
した。

難しいと特に感じたのは考え方や価値観、子ども
に対する考え方の違いが出てきた時です。私たちが
どんなつもりで、またはなぜそうしているのか、な
ぜこれを使っているのかなどきちんと伝えられるよ
うに、普段から考えていることがとても重要なこと
なのだと感じました。保護者の方々の気持ちや思
いを受け止めていくことはとても大切なことだと思
いますが、「ここは譲れない部分だ」と思うこと
は、根拠を明確にしつ
つ、角が立たないように、
に、でもはつきりと伝え
ることも必要なのだと
思いました。たとえばこ
のクラス（二、三歳児混
合）では、絵を描く時の



ために水性ペンを出してあるが、なぜクレヨンではないのかとたずねられた時などです。

Q このクラスにボランティア実習生として二年間参加して、自分の中で変わった点・向上した点は何ですか？

A まず、子どもたちの見方が変わりました。参加する前までは、正直、「上」から見ている自分がありました。しかし、このクラスで同じ一人の人として向き合い、同じ目線であることができて始めているように思います。また、子どもたちの様子一つひとつを、なぜ、どんな思いでそうしたのかと考え、これからその子にとって何が大切で、どうかかわってあげばいいのかと考えることも少しずつでき始めています。

また、以前よりも子どもたちの様子を細やかに見ようとする気持ちがあるように思います。何気ない言葉や行動がその子にとっての大きな成長だったり、叩いたり押しのかたりといった一見マイナスに捉えがちなことの裏にある子どもの気持ち（そこを

通りたかった、その子に興味があった、返ってくる反応を楽しんでいるなど）を感じ取ろうとすることも以前では考えもしなかったと思います。ミーティングなどで他の先生が考えていることや遊んだ様子を見聞きしたことで、自分だけの保育の方法だけでなく、多角的に子どもの様子を知ったり考えたりする機会が増えたと思います。

そして、他の人に自分の考えやしたことを話すことで、いろいろなことが返ってきて、自分のしていることに多少自信をもってできるようになったと思います。もともと小さい頃から相当消極的だったので（本当ですよ）、あれだけ人に話せるようになったのは自分でも驚いています。

このクラスに来る前は、子どもの頃からの夢が現実のものに近づくにつれて「自分なんかができるのか」と自信を失っていたので……。しかし、先生方がありのままの私を受け止めてくれ、たくさんのことを教えてくださったおかげで、自分が目指す保育のヴィジョンを少しずつ明確にすることができ、

「自分なんかができるのか」から「自分ができることをやってみよう」と思えるようになりました。

Q 子どもから見て、自分はどんな先生だと思えますか。またこれからどうなりたいですか。

A 私は、子どもと一緒にわあーっと盛り上がり、はしゃいだり、感覚的な楽しさを一緒に楽しむことはよくしていますが、その中で少し冷静になって「こうしたらいんじゃないかな？」と考えることがまだできていないように思います。一歩引いて全体を見る、ということをする中で、更に盛り上がりつつ遊ぶにはどうしたらいいか、他の人たちともかわりをもって、みんなで楽しむのはどうか？ など、今その子にとって、必要なことを盛り込んでいくことができ、彼らの成長にとっていい経験ができる保育ができるようになります。同じようなことですが、サポーターのような役割や、機転が利くようにもなりたいです。何かうまくいかなかった時に、こちらが子どもの気持ち切り替わるような

かわりをするので、その場が収まったり、トラブルになりかけていたことが楽しく遊べてしまったりするようになると思うので、柔軟な考え方や頭の回転を早くできるといいなと思っています。

初めの頃、この学生は恥ずかしがりやで表情も硬く、自分をどんどん開いて表してくるタイプではありませんでした。その人が外向的で積極的なタイプに変わったというわけではありません。今でもやはり静かめで、シャイで、大勢の中では一歩引いたところにはいますが、そのまなざしには輝きがあり、この人の扉は開いていることがわかります。学生が育つ時とは、私たちに信頼を寄せ、外の世界に期待を抱き、自分を委ねてみる気持ちになった時でしょう。それは内側から扉を開いてくれる時であって、私たちはどうしたらそういう時を迎えることができますのか、目の前の学生たちの輝き方を注意深く見つめ、もう一度自分の原体験を整理してみたいと思います。

(鎌倉女子大学幼稚部)